集

俳句フォーラム

2005 年 4 月　第 15 号

白山句会

坪庭金賞　西村慧子

腑に落ちぬ坪庭金賞竹の春
ばら園のばら一色に秋ぐもり
盗れそうな梔子の実墓地晴れ渡り
質草の袷ありしか一葉居
歳月のくらしも井戸も冬もみじ

千と万　浦川哲子

見返りの坂の由来や十二月
冬茜大観旧居の勝手口
これが路地龍の玉ある質屋跡
夫の留守切り花にする実千両
万両やバックの奥に珊瑚玉

しんがりの秋　川越静子

叔母の墓このあたりかと枇杷の花
しんがりの秋の赤さや烏瓜
朴落葉落ちん体勢寂の寺
足止める上水楚々と秋深め
梵鐘は置かれしままに寺小春

紅の秋　都築繁子

遠き山バスケットに盛る紅の秋
秋灯す松本楼の白クロス
猛火あと残る梵鐘朴落葉
一葉の通いし質屋冬ざるる
掘抜井戸一葉もせし年用意

菊坂　佐藤喜孝

菊坂の廂間にみるしぐれ空
書しぐれ井戸に乾きし晒布
冬もみぢ一二度鴉啼いてゆく
冬ざれの中にいちにち飴ん棒
千兩のはすかひに花さきにけり

ふかふかの　芝　尚子

河骨の枯がれの池走る鴨
ふかふかのいてふ落葉を踏みしめて
名にし負う其角の墓の柚子金柑
菊坂の手押しポンプや冬ざるる
花八つ手古き家いえ鉢並ぶ

樋口一葉探訪　田中藤穂

一葉の汲みし井戸ありしぐれ雲
柚子ならぶ菊坂下の青物屋
一葉は知らぬビル街年詰まる
十二月一葉新札ふところに
一葉も歩きし町に買ふ慈姑

烏山寺町　平野無石

落葉掃く老禅僧の野球帽
冷まじや鏡に大震災の痕
秋大根主婦の眼となる俳句の眼
鶫鳴くや欅の径に寺いくつ
武蔵野の空澄む二十六寺かな

烏山寺町　伊藤雅子

初冬の玉川上水太き鯉
寺町の長き石塀朴落葉
小春日の歌麿の墓掃き浄め
浮御堂水輪幾重にも鴨の池
実南天そば切り寺の木の門扉

沢蔵司　松村東亜未

鰐口の綱振りゆらし年惜しむ
路地奥の急な石段花八ッ手
年歩む伊勢屋質店壁真白
沢蔵司視線はずさず年守る
石灯籠障子ましろく坂に向く

路地　植木やす子

歳晩や路地に苔ありひびのあり
冬日和老木の下コロッケ喰う
くちなしの実の二つ三つ墓の路
秋の雨地面に跳る音符かな
寄鍋や座して今年の納めなり

気息　　大山夏子

秋の薔薇赤はしとどに口重し
花八つ手路地の気息の止まりしまま
菊坂の廂間つつじの返り花
一葉のむかしも井戸に落葉降る
木枯や其角の墓につきあたる

白山句会句会報 ― 抜粋 ―

第五十回　日比谷公園　平成16年10月20日

（参加）西村慧子、都築繁子、佐藤喜孝、平野無石、植木やす子、大山夏子

台風23号のため朝から土砂降りで、急遽予定を変更し日比谷公園に。ちょうどガーデニングショーの期間中だが、イベントの花壇はすべてテントで覆われ、これは無謀だったかと一瞬悔やんだ。が、一画に造園の出展が幾つか並んでいて、それぞれの個性的な工夫が面白く、金賞、銀賞等の札も提示されていて楽しめた。心字池のほとりには、すずかけの大きな木があり、青い実が鈴生りだった。

雨いつもあたらし鈴懸の実をぬらし　喜孝（選）繁・無・夏

青き実を傘で落とさん露寒日　やす子（選）繁・無・慧

喜孝さん、「いつもあたらし」の感覚にひかれる。やす子さんの「青き実を傘で落とさん」は皆で見守っていた今日の景でよくわかるが、「青き実」は初夏、「露寒」は秋、けれど写生句として生かすなら下五を思い切って変えたほうがいい。「冬の月」などはとの提案も。

テント空の日比谷公園秋黴雨　無石（選）喜
池の面に輪重なり合い秋の雨　やす子（選）喜
楠の実や雨はねている心字池　無石（選）夏・慧
見るものに秋雨きくものにハイドン　喜孝（選）慧

見るものすべて雨の風景。無石さんの「テント」は、ホームレスの青いテントと解釈したが、作者はイベント会場のテントを詠んだとのこと。また「楠の実や」は、心字池と限定しない方がよいのでは。喜孝さんの「見るものに」、リズムがいい。さわやかさはハイドンだからだろうか。モーツアルトだったらそうはいかない。やす子さんは素直な表現で好感が持てる。あとは「池の面に輪重なり合い秋の雨」を「秋の水輪」のように、省略ができれば成功する。

腑に落ちぬ金賞雨の竹の春　慧子（選）夏・や
賞を射るバスケットに盛る紅の秋　繁子（選）や・慧

（以下略）

一庵句会

寒昴　阿部晴山

たたずみて言葉は落ち葉のうらがえし
インスピレーション猫の寝言で師が走る
初雪やむかしむかしの父がいる
初の雪心の創を増やしけり
師の笑顔重ねかさなる寒昴

湯婆　小林むつみ

新札に折り目をつけて一葉忌
小春日の臨海工場静まりぬ
初雪や華奢な達磨が溶け残る
湯婆に添わすや母の小さき足
人日や子連れの猫に睨まれる

野水仙　馬場三枝子

愛の羽根帽子につけてマチス展
黄落のしきりに風の遊びおり
石蕗咲いて石灯籠の存在感
日本の浮沈語りて燗の酒
野水仙干物並べている岬

寒行　瀬良梅子

読経して僧寒行の列整え
冬富士を背に修行僧素足なり
正月の飾り簡略に八十路かな
破魔矢持つ孫を追いつつ詣でけり
縫いぐるみの酉を飾りて春祝う

兄　松澤茂

山下桜華氏に代わりて詠む

ふるさとを語る桜花の彩りに
赤トンボふるさとの兄さがしおり
かなしみを見せずに逝ける兄の汗
生きたいとリハビリの跡夏終る

冬へ　竹内太郎

行く秋や珈琲店のスロージャズ
紅葉して尚も夕映え八ヶ岳
大太鼓打つて迎へる冬将軍
水をさす言葉呑込む懐手
何にでも醤油をかける師走人

師いわく　木村鈴代

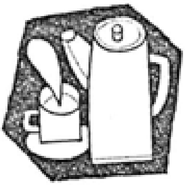
秋晴れは久しぶりねと花を買ふ
アンサンブル奏でて居りぬ紅葉渓
編隊の飛ぶ銀翼の秋の空
師いわく書は画のやうにと秋深む
はしゃぎつゝ柿をもぎけり孫達と

黄水仙　鈴木国子

枯草をかきわけ見れば香の青し
戸を繰りて薄氷にのる紅椿
海風に折り重なりし黄色水仙
残月や一面の霜かがやかす
星青く寒風住処揺るがして

うぶすな　竹村尚紘

うぶすなは東京の町空っ風
一陣の風黄落となりにけり
効能を信じて耐える年の暮れ
屠蘇酌むや五臓六腑に異常なし
初春やリュックも軽く吟行す



御苑句会

離郷　若泉真樹

牛乗せたトラックが過ぎ百舌の贄
離郷めく秋空荷物重くなる
水湧くや右肩に触る式部の実
漁夫の作る刺身ぶっきら棒に秋
神の留守澪を曳きゆく白き船

町工場　東　紀子

行く秋やねんざの足で旅をせり
晩秋のステンドグラスの陽に祈り
山茶花の咲く花散る花町工場
食積も生花もととのい息子(こ)らを待つ
初春の老母を囲む曾孫六人

柿実る　松永ハツエ

柿実る飲めば安堵す保健薬
ひよどりに元気を貰う目覚めかな
冬の翡翠空(くう)をはばたき心字池
三回忌庭中侘しい冬の草
西海の渦潮速し十二月

太極拳　橘高絹子

ヒヨドリの初音横切る太極拳
息白や太極拳の無我となる
冬日だまり通園バス待つ赤い頬
冬薔薇弱き心に凛々と
去年今年平和を祈る手でありぬ

冬の蜂　佐藤　仁

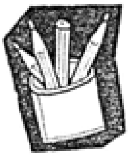
逆らわず身を流しいる浮寝鳥
独唱の子の大人びて小春なり
ひざまづき日に祈りおり冬の蜂
キューポラの煙逆らひ凩や
「着信あり」の明滅憂きや小夜時雨

古代史　　福山至遊

古墳への標や白き曼珠沙華
古代史の謎が深まる稲穂かな
北風を見据えて鴉動かざり
来年の手帳が届く春支度
負の遺産増やして七五三派手に

萩の道　　遠塚青嵐

石榴の実程良く実れ出発(たびだち)に
一六年九月水上勉逝去
竹が泣く永久の眠りや夜半の秋
風の禍や梨の実落下おちこちに
しじみ蝶舞う石畳法輪寺
通りゃんせ今は枯れ色萩の道



随想

俳人・八田木枯

福山至遊

正直、この方の名を今まで全く知らなかった。

「俳句」十一月号の合評鼎談の中で、八田木枯氏の句評が行なわれていて興味が湧いた。合評鼎談は二ヶ月前の発表句に対する評なので、早速九月号を引っ張り出して八田木枯氏の句をあらためて読み直した。感心したとしても、私自身がこの種の句を、今後詠むだろうという意識はあまりない。

ただ、自分の俳句との違いに驚いているところである。九月号には八句載っているが、そのうち自分で感銘したものを鑑賞してみたい。

正体の無くなるまでに桃冷えし

桃を冷やして、冷えきった状態を「正体の無くなるまでに」なんてとても言えない。人間について使えば、正体無く酔ったような状態に使うだろうが、何しろ相手は桃である。感覚が無くなる程までに冷えきった、という積りで詠まれたのではないかと思う。

むらさきにちかきくれなゐ鶴の疵

疵を負った鶴を見たことがないので、何とも言えないが、多分血がまだ疵にこびりついているのだろう。その描写が客観写生の真髄のように、よく見て表現したとしか言いようのない細かさである。ここからは疵を負った鶴に対する思いやりではなく、その観察、そして美しさに酔いしれている作者が伺える。この色の描写が高貴であり、そこにまた、鶴という日本の高貴な鳥の代表のようなものを取り合わせた。

はったいは不承不承とこぼれけり

「はったい」とは、「米または麦の新穀を炒って焦がし粉にしたもので、砂糖を加えたり、水や湯で練ったりして食べる」もので、いわゆる「麦こがし」である。これが夏の季語にもなっている。こちらがこぼしたくなくても、こぼれる種類の菓子は沢山ある。それを「はったい」の方が不承不承だというのだから面白い。確かにこぼれたくてこぼれている訳ではあるまい。引力のせいである。

おほぞらをひろくこなして盆の月

盆の月となるとこれほど大らかには詠み難い。この「こなして」は、多分「使いこなして」の意だと思うが、大空の隅から隅まで使いこなしているという表現から、晴れ渡っている様子が分る。そして、月が空を使い慣れている様子が「こなして」から伝わってくる。「こなして」の代わりに「使ひて」では、やはり月の格が一つ落ちる。

それらしく老いて佃に踊りけり

読み手は「それらしく」を、いか様にも想像できる。自分になぞらえることも出来るし、若い人なら両親や祖父母を思えばいいだろう。決して暗い老いではない。何故なら、佃祭りで踊っているからである。喜怒哀楽さまざまあった人生を「それらしく」という一言で片付けている。

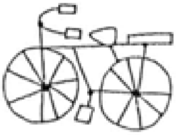
盆唄はゆるく節目のささくれし

勝手ながらこの盆唄は、遠くから聞こえてくる盆唄だと感じた。盆踊りの唄は、近くでは結構喧しいものである。「ゆるく」などと鑑賞できるのは、物理的にもある程度の距離を置かなければならない。池田澄子氏も、そこまでは何とか自分にも詠めても、「ささくれし」は詠めないと言われている。遠い唄だけに風に乗ってくる間に、風の向きが変ったり、雑音が入ったりで、音程やリズムが狂って聞こえることがある。または最

近は殆んどテープかディスクなので、どこかに傷がついているのかも知れない。この「ささくれし」だけで、この句の独自性が出てくる。

このように八田氏の句には暗さがない。「疵」を見ても「節目のささくれ」を見ても、それをマイナスのイメージで捉えていない。私の目指すものとは違うと感じるのは、表現の旨さはあるが、底に流れる哲学が違うと感じるからである。誤解の無いように再度書くが「私の目指すもの」との違いであり、「私の今の句」との違いではない。今の句にはそれ程の統一性はないと思っているからである。それにしても、八田氏の句との出会いは、自分の普段目にしている俳句の範囲の狭さを痛感させられる出来事だった。

☆以上はホームページに載せているものを一部訂正して転載するものです。



星と枯草

壺井繁治

星と枯草が話してゐた
静かな夜更け
私のまはりにだけ風が吹いてゐた
何かさびしく
彼等の話に加はらうとしたら
星が天井から落ちて来た
枯草の中をさがしてみたけれども
星は遂に見つからなかった

朝
目をさますと
重たい石が一つ
こころの中に落ちてゐた
それから毎日
私は獨言をいってゐる
石はいつ星となるだらう
石はいつ星となるだらう